

「昭和天皇の戦争論」

茶谷 誠一（志学館大学）

1. 『拝謁記』の史料的性格

- ・天皇の心情、時局認識がうかがえる第1級の歴史史料 →とくに時期が重要
- ・天皇の主観にもとづく発言 →『拝謁記』を用いる際には史料批判が必要
- ・既刊史料との関係
 - 「昭和天皇独白録」(1990)や「聖談拝聴録」(1991ほか)との共通性
 - 『拝謁記』で示される天皇の戦争認識は持論=本音(史料の基本的性格)
 - 「独白録」は「東京裁判用の弁明書」という性格にとどまらず、天皇の歴史認識を示す基礎史料として再定義できる

2. 昭和天皇の戦争論

(1) 天皇にとっての「戦争」

- ・天皇のいう「戦争」=対英米戦(満州事変、日中戦争は含まれない)
- 張作霖爆殺事件の発言回数と語り方に注目

(2) 天皇が語る戦争認識

- ・「責任転嫁」に終始する姿勢
 - 「豈朕が志ならんや」「私にもあると言えばあるが」etc
 - 「春秋の筆法」という表現(対英米戦の責任は「米国と近衛」)
- ・「戦争」を招いた責任は誰に？

① 軍部(陸軍)

→「下剋上」という言葉の頻出と、「陸軍風」「陸軍的」という陸軍教育への評価

② 米国

→「春秋の筆法」でロンドン海軍軍縮会議や満州事変時における米国の対応を非難
→『独白録』の「大東亜戦争の遠因」を補足

③ 国民

→日本人の「付和雷同性」や熱狂性、教養の低さ
→「聖談拝聴録」内の「戦争の原因」を詳説

3. 現代において『拝謁記』を読む意義

- ・昭和天皇の視点からみる現代日本

戦後78年経過した現代における日本人の「民度」

→「付和雷同性」と教養の低さは変化したか?(→PP参照)

→安保関連3文書(2022)と国防の最前線になりつつある鹿児島島の現状への認知